
一粒の豆

山羊ノ宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一粒の豆

【Nコード】

N6791J

【作者名】

山羊ノ宮

【あらすじ】

「ここに一粒の豆があります」

旅人はひざまずき、恭しく王と姫に一粒の豆を掲げた。

「ここに一粒の豆があります」

旅人はひざまずき、恭しく王と姫に一粒の豆を掲げた。

「実を申しますとこの豆、かの『ジャックと豆の木』に出てくる豆なのでございます。植えれば天高く、雲にまで届くほど成長する、それはもう珍しい品なのでございます」

旅人の話には姫は目を丸くして、聞き入っている。

時折姫は咳をし、王はそんな病弱な姫の姿を心配そうに見ていた。

「お父様、あの豆が欲しい」

「そうか・・・だが、そのような豆一粒に金を出すなど・・・」

せがむ姫に王はあまり気乗りしていなさそうであった。

そんな二人の会話に、すまなさそうに旅人が割り込む。

「ただ一つ問題がありました」

「問題？どのようなことなのですか？」

「はい。それがこの豆は大変古いものでして、少々芽が出るのに時間がかかるのです」

「そうなのですか」

「はい。約一年、一日も欠かさず水をやり続けなさいといけないのです」

「一年も？」

「はい。何せ特殊な豆ですから」

旅人の言葉にすっかり意気消沈してしまう姫であった。

「やはりそのような物を買うのは気が引けるな。今回は止めておくことにしよう」

王の言葉に姫ははつと顔を上げる。

そして、王に涙目で上目使いに欲しいと言葉を漏らした。

「うーむ・・・では、そなたが毎日水やりをするというのであれば、買ってやらなくもないが・・・」

「ホント?! やります、私、やります、毎日。だから、だから・・・」

「分かった、分かった。では、その豆買うとしよう」
旅人は再度深く頭を垂れた。

「お父様、大好き!」

抱きつく姫に王はやれやれと髭を撫でるのだった。

それから一年が過ぎてもその豆からは芽が出る気配がなかった。けれど、姫は今日も豆のまいた地面に水をやる。

「早く芽が出ないかな?」

煌めく日差しの元、元氣そうに笑顔で水をやる姫の姿を見て、王は微笑むのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6791j/>

一粒の豆

2010年10月21日20時22分発行